

戦後俳句史の「事件」としての金子兜太

その歩みと思想の展開

伊 東 裕 起

1. はじめに

2018年2月20日、日本の現代俳句をリードし続けてきた金子兜太が98歳で亡くなった。対馬康子は、『現代俳句』の8月号に寄せた追悼文に、「俳人金子兜太は、世界に向かって、日本の俳句のアイデンティティを体現する存在として、俳句とは何かを身をもって示した」⁽¹⁾と書いた。彼女がいみじくも要約したように、金子兜太は国内で現代俳句の運動を率いてきただけでなく、それを世界にも示した人物でもあった。彼は2008年、日本人で初めて正岡子規国際俳句賞の大賞を受賞したが、愛媛県文化振興財団は、その受賞理由は以下のように述べている。

金子兜太氏は、戦後世代作家として最も活動的な作家である。「俳句は文学の一部なり」(『俳諧大要』)とした正岡子規の精神を最も強く体得し、戦後俳句史の「事件」としての、社会性俳句、造型俳句、前衛俳句という運動や主張を主体的に展開した。のみならずそれらは狭い党派に止まることなく、俳句界全体にその影響を浸透させた。例えば、前衛俳句は伝統俳句に対立する運動と理解されているが、むしろ氏の活動によ

って伝統俳句が活気づけられた点を見逃せない。前衛俳句運動によって、伝統俳句の意識が明瞭となり、新しい伝統俳句運動も誕生した。氏はその後も、小林一茶や放浪の俳人たち、郷里の秩父など土着性の評価を踏まえて新しい俳句への意欲を燃やし続けている。(中略)なお、俳句の国際化の面では、中国や欧米諸国を歴訪し、俳句の普及に努めるほか、現代俳句協会に国際部を創設するなどの貢献をした。⁽²⁾

これもまた、金子兜太の業績の要約になっている。つまり、彼が成し遂げたこととして最も重要なのは、俳句が文学かどうか疑われた時代に、正岡子規のように俳句を文学として示そうとしたということであり、その目的のために彼が主導した文学運動として、「社会性俳句」や「造型俳句」、そして「前衛俳句」があるということである⁽³⁾。また、彼が「前衛俳句」を推し進めるだけでなく、「伝統俳句」との関係回復を行ったことも特筆すべきであり、一茶や山頭火ら放浪の俳人たちの研究と郷里の秩父への思いから導き出した「定住漂泊」の思想と、同哲学の提示と時を同じくして始めた俳句の国際化運動は、ローカルとグローバルをつなぐものとして意義深いものである。

このような彼の業績のうち、革新的要素である「社会性俳句」「造型論」「前衛俳句」の三つを愛媛県文化振興財団は「戦後俳句の『事件』」と呼んでいるが、彼の生涯を通じた俳句活動全体を「事件」と呼んでもいいだろう。

本稿では、その「事件」、金子兜太の多くの業績のうち、上記の受賞理由に挙げられたものについて検討する。また、戦時中から続く現代俳句の歴史を概観するとともに、金子兜太が彼の生涯の中でどのような思想や哲学、表現手法や俳句理論を作り上げたのかを論じる。加えて、彼と世界俳句の関わりを論じ、最後に後期や最晩年の作品と思想を論じる。

2. 現代俳句の始まり：それは戦時中から始まった

まずは、いわゆる「現代俳句」とは何かについて概観したい。現代俳句協会の公式見解では、「俳句」と異なる「現代俳句」という新しい文学形式が存在するのではなく、あくまでも「現代俳句」とは現代の俳句にすぎないと述べており、金子兜太もこれに同意している⁽⁴⁾。しかし、現代の俳句を目指すということは、現代に生きる作家自身を描くことや、その作家が生きる社会を描くことにもつながる。そのため、表現手法は時として、自然の描写の枠を超えていく。

「現代俳句の本格：『第二芸術』を超える二つの志向」というエッセイで、金子兜太は現代俳句について彼の考えを示した。彼によれば、現代の俳句というものは、現代に生きている私たちと切り離せないものである。しかし、ただ自然の風景を写生しただけでは、私達の今を十分に描けない。それゆえに、彼や彼と志を同じくした俳人たちは「現在の生の有り態に立つ、その生まましさを俳句に込める——という当然の志向を、戦後、意識して積極的に押し出すようにした」⁽⁵⁾のだという。この、「現在の生の有り態に立つ」生々しさを「戦後、意識して積極的に押し出すようにした」志向が、金子兜太らによる戦後の現代俳句である。

現代俳句の書き手たちは主観を重視し、自然物の写生よりも人間の内面を見つめ、時として季語を使わない俳句や自由律の俳句も書くようになった。なお、後で論じるように金子兜太は自分の作風はあくまで伝統的なものの延長線上にあるとしているが、概して、無季や自由律を認める「現代俳句」は、それらを認めない「伝統俳句」と対立する概念として扱われる傾向にある。

このような戦後の新しい俳句運動であるが、これは戦争終結時点から始まったのではない。では、具体的にどのような形で現代俳句が始まったのだら

うか。

正岡子規から『ホトトギス』を引き継いだ高浜虚子は、1912年、同誌に俳句雑詠欄を復活させ、総合芸芸誌から俳句誌に改編して1913年に俳句専念を宣言した。彼は『ホトトギス』に集う弟子たちに客観写生・花鳥諷詠の俳句を推奨した。俳句専門誌となった新しい『ホトトギス』は人気を博し、『『ホトトギス』に入選したら、赤飯を炊いて祝ったという伝説も生まれ⁽⁶⁾、商業的にも成功した。当時の俳壇は寡占状態かつピラミッド構造になっており、「大正から昭和前期にかけて俳誌といえば『ホトトギス』を指し、その俳人たちの頂点に立っていたのが高浜虚子だった⁽⁷⁾」。虚子は新鋭の育成にも熱心であり、期待の若手俳人として高野素十、阿波野青畝、水原秋桜子、山口誓子のいわゆる「ホトトギスの四S」を育て、注目を集めていた⁽⁸⁾。

しかし、1931年、水原秋桜子は『『自然の真』と『文芸上の真』』を発表し、客観写生・花鳥諷詠を謳う虚子から離反した。秋桜子はこの評論において、俳人は単に主観を排して「自然の真」よりもむしろ自らの主観的な「文芸上の真」を追求すべきと主張した⁽⁹⁾。この水原秋桜子の率いていた同人誌が『馬酔木』⁽¹⁰⁾であり、金子兜太の父、金子伊昔紅（本名：元春）はその同人に名を連ねていた。兜太の自伝『わが戦後俳句史』によると、伊昔紅は『若鮎』⁽¹¹⁾という『馬酔木』派の秩父支部のような句会を持っていた。これは、伊昔紅が秋桜子と獨協中学校時代の同窓でもあった縁によるものだという⁽¹²⁾。幼い兜太は、その父が主宰する句会での秩父の荒くれ者たちの酒と喧嘩にまみれた姿をよく見知っていた⁽¹³⁾。

秋桜子の『ホトトギス』離反事件は、新しい時代の始まりであった。金子兜太は、戦後の現代俳句⁽¹⁴⁾は終戦後ではなくむしろ「戦時中、さかのほれば十五年戦争のはじまりのあたり、昭和六年〔引用者註：1931年〕ごろから⁽¹⁵⁾始まったと書いている。つまり、1931年の満州事変から始まる戦争の季節と、現代俳句の萌芽期が重なるのである。

これは彼だけの見解ではない。川名大もまた、「これは定説であるが、その妥当性は昭和7年〔1931年〕以後の表現史的な展開によって裏づけられる」⁽¹⁶⁾としている。しかし、川名の研究は金子兜太のように戦時体制へ向かう不穏な社会情勢を重視しているものの、それだけに留まてはいない。彼の研究は俳句表現の変化をもたらしたのものとして、関東大震災の復興とともに現れたモダンな都市としての東京の存在と労働問題の二つを重視している⁽¹⁷⁾。小説や詩などでは、1920年代にすでに東京を中心としたモダニズム運動が起き、モダン都市東京や労働問題などを文学の題材として扱いはじめていた。俳句では『ホトトギス』派の圧倒的な影響力により、そのような新しい文学運動に共鳴することが難しかったが、1931年の秋桜子の離反以降、『ホトトギス』派の陰でそれまで抑圧されてきたモダニズム的な表現が一気に花開いたというのである⁽¹⁸⁾。

秋桜子が『ホトトギス』から離反した後、様々な俳句雑誌が生まれた。例えば井上白文地や平畑静塔らの『京大俳句』、嶋田青峰の『土上』、日野草城の『旗艦』、吉岡禅寺洞の『天の川』などが挙げられる。これらの雑誌の俳句は、先に述べたように震災復興後のモダン都市東京を中心に活動し、都会の新しい素材を俳句に取り入れた前衛的な作風によって「モダニズム俳句」と呼ばれた。これらのグループによる新しい俳句運動に、河東碧梧桐から萩原井泉水を経てつながる自由律俳句の流れの一部も合流した。その自由律の俳句雑誌の中で有名なものとして、自由律プロレタリア俳句の栗林一石路や橋本夢道らによる『俳句生活』がある。彼らの目指すものは同一ではなく、様々であった。このような新しい俳句運動は、半ば侮蔑的に「新興俳句」と呼ばれ、後にその名称を自らも引き受けるようになった。

新興俳句の俳人たちは新しい素材を俳句に取り入れるだけではなく、無季の俳句も多く作るようになった。そのため、有季にこだわる秋桜子や誓子は、半ば新興俳句から手を引いた形となる。誓子は『京大俳句』の顧問を務めて

いたが、自作としては無季を許容できないとし、『京大俳句』を脱会して秋桜子の『馬酔木』に参加した。そして『馬酔木』もさらに活性化してゆく。『馬酔木』に参加し、有季定型でありながら自己表現を目指す若手俳人の加藤楸邨と石田波郷、そして『ホトトギス』に残りながらも独自の表現を目指す中村草田男らは、雑誌『俳句研究』の座談会をきっかけに、「人間探求派」と呼ばれた⁽¹⁹⁾。彼ら「人間探求派」の三人の代表作には次のようなものがある⁽²⁰⁾。

颯雲人に告ぐべきことならず	加藤楸邨
バスを待ち大路の春をうたがはず	石田波郷
降る雪や明治は遠くなりけり	中村草田男

日中戦争が始まると、無季俳句こそが戦争を描けるとし、西東三鬼らいわゆる銃後の新興俳句の俳人による「戦火想望俳句」が書かれるようになった。

機関銃眉間ニ殺ス花ガ咲ク	西東三鬼
渡河の兵墓碑となり友を失へり	東京三（秋元不死男）
埋めてみて敵なることを忘れりたり	波止影夫

これらは必ずしも反戦を意図したものではなかったものの、反戦とも読めるものである。また、客観的な写生ではなく、戦時中の不安を表現する主観的な内面を表現する俳句も書かれるようになった。

戦争が廊下の奥に立つてゐた	渡辺白泉
戦死者が青き数学より出たり	杉村聖林子

一方、当局による圧力を明確に表現した俳人もいた。

我講義軍靴の音にたゝかれたり 井上白文地
大砲が大きな口あけて俺にむいている初刷 栗林一石路

このような新興俳句運動は、当局の嫌うところとなり、治安維持法違反容疑として特高警察による監視対象となる。川名によれば、「昭和14年 [1939年] には特高による諜報活動は俳人の自宅まで及んでいた⁽²¹⁾」という。

1940年から始まった検挙により、『京大俳句』を中心に9つの雑誌が摘発され、検挙者は40人以上に及んだ⁽²²⁾。拷問により獄中で亡くなった俳人はいないが、少なくとも『土上』の嶋田青峰と『蠍座』の加才信夫が獄中で病を悪化させ、青峰は終戦前に、信夫は戦後に命を落とした⁽²³⁾。検挙されなかったものの、「人間探求派」の中村草田男、加藤楸邨、石田波郷にも監視の目は光り⁽²⁴⁾、日野草城などは戦時中は沈黙を強いられた⁽²⁵⁾。また、秋元不死男のように獄中で創作を続けた者もいた⁽²⁶⁾。

金子兜太もまた、そのような新興俳句人たちや「人間探求派」の俳人たちと交流を持っていた。金子兜太が旧制水戸高校に進学した頃、竹下しづの女、加藤楸邨や中村草田男の指導のもとに「全国高等学校俳句連盟」（のち「学生俳句連盟」）が結成され、機関紙『成層圏』が創刊された。

憲兵氏さぶき書廊に図書を繰りぬ 竹下しづの女⁽²⁷⁾
かじかみて禁閲の書を吾が守れり 竹下しづの女

当時竹下しづの女は福岡県立図書館の図書館司書を務めており、図書の検閲に来た憲兵をも俳句の題材として描いていた。上掲の句は彼女が『成層圏』に1937年に発表した俳句であるが、この俳句は彼女が憲兵の目を逃れて反体制的な「禁閲の書」を隠し持っていることをほのめかしている。兜太は

この句の発表と同じ1937年に『成層圏』に投句を始めたが、これは危険な行為でもあった。

1941年にこの連盟は解散し、雑誌『成層圏』は廃刊となった。彼の自伝『わが戦後俳句史』には、学生中心の『成層圏』の句会にも私服の特高警察が来て監視していた様子が記されている。

五次の検挙（鹿児島県で発刊されていた『きりしま』への波及まで含めて）におよぼいわゆる「俳句事件」があきらかにこの全国学生俳誌にも影をおとしており、草田男や楸邨もにらまれているという噂がささやかれていました。だいいち、『成層圏』という名が未来派風でよくないという人もいたのです。たしか、これも私が堀徹と初見の年の『成層圏』句会のときでしたが、このときは新宿のヴェルテルという喫茶店でした。そこに途中から私服の特高がやってきて、終わるまで椅子に腰かけてメモをとっていたのです。その翌年の早春に第一次の『京大俳句』グループの検挙があったのですから、ずいぶん早いお出まし、ということになります。そのときの草田男の講評の苦しい様子がいまでも忘れられません。⁽²⁸⁾

『成層圏』の廃刊後、兜太は加藤楸邨率いる『寒雷』の同人となるが、注目すべきは、彼が『寒雷』だけでなく1940年から41年にかけて嶋田青峰主宰の『土上』に投句し、掲載されていたという事実だ。先にも述べたが、同結社は1940年から続く新興俳句弾圧事件に連座し、主宰の青峰は41年に治安維持法違反容疑で逮捕・投獄され、その後釈放はされたものの、結核を悪化させて終戦前に命を落とした。彼は獄中死ではなかったものの、金子兜太は「青峯師は獄に死んだ」⁽²⁹⁾と書いているように、青峰が獄中死したと認識していたようだ。

金子兜太とマブソン青眼らは、この新興俳句弾圧事件を悼んで「俳句弾圧不忘の碑」を建立した。文字は金子兜太の揮毫であり、2018年の2月25日に除幕式が予定されていたが、彼は除幕式の5日前に亡くなったため、出席は叶わなかった⁽³⁰⁾。

3. 戦後の出発：「第二芸術論」論争

戦後、1946年、栗林一石路ら共産主義志向の作家によって新俳句人連盟が発足した。しかし、特定の政党とのつながりを西東三鬼が指摘し、そこから分離独立する形で、1947年、政党とのつながりを持たない現代俳句協会が西東三鬼らによって設立された。

同協会が設立されたのは、いわゆる『「第二芸術論」論争』の時期であった。「第二芸術論——現代俳句について——」とは1946年に桑原武夫によって著わされた論文であり、論争を引き起こしたものである。I. A. リチャーズの批評理論に影響を受けた桑原は、大家と素人の俳句を、作者名を隠した状態で選ばせるという実験を行った。すると、読者は大家も素人も区別できなかった、という結果が得られた。このことから分かるように、俳句というものは作品の優劣ではなく封建的な党派性によって価値が決まっているものであり、ゆえに俳句を「芸術」と呼ぶことはできない。たとえ「芸術」と呼ばれるとしても、通常のものより劣る「第二芸術」と呼ぶしかない、とするものであった。「第二芸術」である俳句は、「老人や病人が余技とし、消閑の具とするにふさわしい。しかし、かかる慰戯を現代人が心魂を撃ち込むべき芸術と考えるだろうか⁽³¹⁾と、芸術ではなく単なる慰めの道具に過ぎないと言いつつ。そして「今の現実的人生」を描けない⁽³²⁾文学未満の俳句は、戦後の「文化国家」にとって益とならないため⁽³³⁾、学校教育から「俳諧的なものをしめ出してもらいたい⁽³⁴⁾と、桑原の筆は俳句教育禁止論まで及んだ。

この問題提起に対して、俳人たちは俳句の実作で、あるいは評論で異議申し立てを行った。金子兜太は、先にも引いたエッセイ「現代俳句の本格：『第二芸術』を超える二つの志向」で次のように書いた。

現在の生の有り態に立つ、その生まましさを俳句に込める——という当然の志向を、戦後、意識して積極的に押し出すようにしたのは、その状況〔引用者注：『第二芸術論』で批判された、俳壇におけるセクト主義〕への反撥があったからで、伝統の名にもたれ、季題の既成情緒にもたれあっている俳句に、明確に対立しようとしたのである。その場合、桑原氏の評論が一つの刺激となっていたことは間違いない。⁽³⁵⁾

俳壇におけるセクト主義と「伝統の名にもたれ、季題の既成情緒にもたれあっている俳句」に対する桑原による批判は受け止めながらも、「今の現実的的人生」を描けないという点について、金子兜太は強く反発したのである。この「今の現実的的人生」を描くものこそが、金子兜太にとっての「現代俳句」にほかならない。

4. 社会性俳句と造型論

桑原の「第二芸術論」に刺激されて起きた議論の一つに、俳句が社会問題を扱えるのか否か、という議論があった。1954年、沢木欣一が主宰する同人誌『風』で、「俳句と社会性」についてのアンケートが行われた。このアンケートに対してさまざまな回答が寄せられたが、沢木欣一は「社会性のある俳句とは、社会主義的イデオロギーを根底に持った生き方、態度、意識、感覚から生れる俳句を中心に広い範囲、過程の進歩的傾向にある俳句」⁽³⁶⁾だと答え、佐藤鬼房は「社会主義リアリズム」が重要だと回答した⁽³⁷⁾。これらは

極めて政治的かつ党派的な回答である。もし沢木欣一が正しいとするなら、「社会主義的イデオロギー」と相容れない生き方からは「社会性のある俳句」は生まれなくなる。また佐藤鬼房が正しいならば、社会性のある俳句を書くためには「社会主義リアリズム」に立脚せねばならず、その表現は社会主義革命に挺身する必要がある。これらは芸術性よりも政治性を優先する姿勢でもあり、政治性さえあれば芸術性が低くても優れた作品ということになる。

このアンケートには、そのような「社会主義的イデオロギー」「社会主義リアリズム」に基づく意見だけでなく、様々な意見が寄せられた。例えば、社会性は「素材」にすぎないという意見⁽³⁸⁾や、誰でも社会の中で生きているのだから、社会性など論じる必要もない、と、議論自体を無化しようとする意見⁽³⁹⁾も見られた。それに対して、金子兜太は次のように反論した。

- I 社会性は作者の態度の問題である。創作において作者は絶えず自分の生き方に対決しているが、この対決の仕方が作者の態度を決定する。社会性があるという場合、自分を社会的関連のなかで考え、解決しようとする『社会的な姿勢』が意識的にとらえられている態度を指している。
- II 従って、作品は当初社会的事象と自己の接点に重心をかけたかたちで創作され、やがて社会的事象を通して社会機構そのものの批判にまで至ることとなろう。ここで批判の質及び内容が問題となる。
- III 従って、社会性は俳句性と少しもぶつからない。俳句性より根本の事柄である。ただこの態度はいずれは独自の方法を得ることとなるが、俳句性を抹殺するかたちでは行われ得ない。則物は重大なテーマである。⁽⁴⁰⁾

つまり、意識的に自分を社会的なものと切り離して考えるのではなく、社会と関係したものだと思える態度が必要だということである。また、創作は社会と自己の接点から始まるもので、俳句の文学性と社会性は少しも矛盾するものではないということ、そして、それを表現するためには、独自の表現方法を取ることがふさわしいということを経験したことを金子兜太は主張したのである。

その独自の表現方法として彼が提唱したのが、いわゆる「造型論」である。「造型論」とは、1957年に書かれた「俳句の造型について」のなかで提唱されたもので、自己の主體的なヴィジョンを描く手法の一つである。高浜虚子の作句理論・理念である「花鳥諷詠」は、自己を無にし、自己の主観のフィルターを外すことを目指す。この理論における写生である「客観写生」とは、自己と俳句で描く対象との間に何も置かず、純粹に対象を客観的に写生することだとされている（虚子の理論では「花鳥諷詠」と「客観写生」は切り離せない重要なものである）。それに対して兜太の「造型論」では、自己と対象との間のつながりを一度切り離し、自己と対象の間にあるものを「主体」あるいは「創る自分」として意識化し、それを通したイメージを描くことを推奨したのである。兜太自身は、この理論を加藤楸邨ら「人間探求派」の自己への関心と、新興俳句の構成を統合発展させたものだとみなした。

目に見えるものよりも、心に映るものを重視するこの手法は、社会問題を描くときにも効果的であった。自然を描くだけの伝統的な「写生」では、社会問題を描くのは難しい。かといって、社会を素材として「写生」したとしても、表面だけを見つめて描くだけに留まってしまう可能性もある。また、社会を対象としつつ、自己の内面だけを対象とするだけなら、独りよがりのセンチメンタリズムか、あるいは観念的なスローガン俳句になりがちである。自己（内面）と対象（外部・社会）の間にあるヴィジョンを重視する金子兜太の「造型論」は、花鳥諷詠でもない、スローガン俳句でもない社会性俳句

を創り上げたのである。この時期の金子兜太の代表作には、以下の句などがある⁽⁴¹⁾。

湾曲し火傷し爆心地のマラソン	金子兜太
原爆の街停電の林檎つかむ	金子兜太

この方法論は社会性の枠を超えて広がり、兜太の「造型論」的な作品はその他の新たな表現を模索する俳人たち（多行俳句を書いた高柳重信など）の作品とともに「前衛俳句」と呼ばれた。しかし、彼自身は、この用語を嫌った。「よく、伝統派とか前衛派とかいう品定めが行われますが、これくらいアイマイで危険な区別はありません」⁽⁴²⁾とし、その二つが対立するものではないと主張した。

造型論について書かれた彼の主著のひとつ「造型俳句六章」において、彼は正岡子規の『俳諧大要』を引き合いに出し、自らの造型論は子規（と初期の虚子）の写生論の延長線上であると論じた。正岡子規は『俳諧大要』で「俳句は文学の一部なり」と宣言した。その文学とは普遍的な基準にしたがうものではなく、あくまで「確固 [引用者注：各個（人）] の感情」によるものだとし、子規が書いていることを金子兜太は指摘した⁽⁴³⁾。初期の虚子も、「写生といふことは只写生するといふことではなくて、作者がその景色を見てその心に映じた影を描くのである。その影は実物そのものとは異つてゐるのである」と書いた⁽⁴⁴⁾。つまり、正岡子規も虚子も本来主観を重視し、自分の内面のヴィジョンを描くことを良しとしていたのであり、これは自らの「造型論」とつながるものであるとしたのだ。この観点から言うと、いわゆる伝統派と前衛派と分けることはナンセンスなものとなる。

この「造型俳句六章」が書かれた1961年は現代俳句協会から、より伝統的な俳句を目指す俳人協会が分離した年なのだが、金子兜太はこのような形で

自らの俳句哲学を理論化することにより現代俳句協会の足場を固めるとともに、いわゆる前衛派と伝統派を分断しすぎないようにすることによって、俳人協会との過度な対立を避けようとしたという側面もあるだろう。先に引いた正岡子規国際俳句賞大賞の受賞理由において、金子兜太は「『俳句は文学の一部なり』（『俳諧大要』）とした正岡子規の精神を最も強く体得」した人物とされ、「前衛俳句は伝統俳句に対立する運動と理解されているが、むしろ氏の活動によって伝統俳句が活気づけられた点を見逃せない」という側面が指摘されているが、それは、彼がいわゆる伝統派とのつながりを意識した形で思索を巡らせていたこととも無関係ではあるまい。

5. 定住漂泊と秩父の産土

金子兜太は1964年に熊谷の土地を取得し、1967年に終の棲家と定めて同地に転居した。ここから金子兜太は「定住」と「漂泊」、「放浪」などについて思索を深め、小林一茶や種田山頭火など、放浪の俳人の研究を開始した。また、「定住」に関連して、彼が生まれ育った秩父の産土への関心も強めていった。そして彼が1970年代に提唱することになるのが、「定住漂泊」である。これは、芭蕉や一茶、山頭火などのように放浪をすることが難しい現代社会において、どのように俳人としての創作の心を高く保つかについての金子兜太の理論である。

彼によれば、「定住」ということは、「社会」（これを兜太は「日常」と呼ぶことが多い）の中に生きるということである。しかし、人間は「日常」（社会）に安住することはできず、ここではないどこかを「原郷」として求め始める。

彼は「原郷」を一言で「人間のおおもとのふるさと」⁽⁴⁵⁾と呼んでいるが、それは、自らの存在の根源にあたる風景であるという。

原郷とは、誰もが心の奥深いところに持っているもので、おそらくそれは、わたしたちが生まれてから獲得したものじゃない。わたしなりの言い方をさせてもらうなら、それは人知を超えた大きな世界で、わたしたちが生まれるずっと前から存在していて、わたしたちの先祖も代々そうした非常に美しい感覚の世界があることを何となく体で感じ取っていた。⁽⁴⁶⁾

その原郷とは、かつて存在したかもしれないが、失われた風景として立ち現れる「人間のうぶな存在状態——動物的本能とっていいほどに、自然な存在状態——において映像されるイメージ」⁽⁴⁷⁾であるという。究極的には「母親の生殖器」⁽⁴⁸⁾に行きつくところのそれは、地上の生まれ故郷あるいは安住の地を超えた、いのちの根源とも言える場である。しかし同時に、彼にとっての「原郷」は、彼の故郷の秩父とも重なり得る何かである⁽⁴⁹⁾。

人間と「原郷」との関係は、必ずしも良好なものではない。人が生きていく上で、「原郷イメージと現実経験のズレ」⁽⁵⁰⁾が起こり、それが「むなしさ」⁽⁵¹⁾につながる。この「むなしさ」を金子兜太は「浮遊感」⁽⁵²⁾という言葉で表現する。その「浮遊感」による不安定な心理は「生」と「日常」（社会）に「執着」⁽⁵³⁾させるが、「日常」（社会）も流れ続け・変化し続けていくため、「日常」と（社会）ともに流されていく状態となる。これを彼は「日常漂泊」⁽⁵⁴⁾と呼ぶ。多くの日本人はこの状態に陥っていると言えるだろう。

現代の「日常」（社会）の中に暮らしながら、「日常」（社会）に流されず、詩的想像力を保つためにはどうすればいいか。「日常」（社会）の中に「定住」しながらも、それに実存的に抗うことが必要である。それを彼は「反時代の、反自己の、または我念貫徹の、定着を得ぬ魂の有り態」⁽⁵⁵⁾と表現する。このように、「原郷」に根差し、「定住」しながらも、心中だけで「日常」

(社会)に抗って「漂泊」することを兜太は「定住漂泊」と呼んだのだ。

これは実際に旅に出るか否かとは関係ないものもある。生活の場としては定住しながら漂泊する芭蕉や一茶、または生活の場として定住しない山頭火のどちらも、または埼玉県に終の棲家を構えた金子兜太も定住漂泊者なのだ。

海とどまりわれら流れてゆきしかな

金子兜太

また、金子兜太は秩父の歴史や文化を探るうち、秩父事件に興味を持ち、研究を始めた。秩父事件とは、1884年に起きた、秩父困民党による武装蜂起である。減税や借金免除などを求めて三千人ほどが決起し、軍や警官隊と衝突したのだ。困民党が「革命本部」を設置したり、「自由自治元年」という私年号を用いようとしたことなどから、1960年代に注目され始めた。金子兜太は1968年に秩父出身のフランス史研究者井上幸治によって書かれた『秩父事件 自由民権期の農民蜂起』を片手に、実際の秩父の山野を巡り、思索を深めた。金子兜太自身は裕福な医者や工場主の家系だったため、秩父事件の時は蜂起した困民党やそのシンパではなく、その敵として困民党に襲われた側であった。「秩父困民党という言葉を知ったのはずっとあとのことで、幼時から青年期にかけて私が聞いていたのは、もっぱら秩父騒動、暴動、そして暴徒だった」⁽⁵⁶⁾と彼は書いている。さらに、祖父は真庭念流で目録を受けるほどの、優れた腕前の剣術使いで、困民党と戦ったという逸話もある⁽⁵⁷⁾。「少年の私は、その刀を抜いてみるのが楽しかったが、しかしどこかで、暴徒でなく、警官と斬り合ったのなら、もっとおもしろかったのに、とおもう気持があった」⁽⁵⁸⁾と書いているように、地主階級に生まれ、貧困から身を遠く守られて育った側としての屈折した感情を、彼は抱いていたようである。

沢蟹・毛桃喰い暗らみ立つ困民史

金子兜太

また、秩父事件の決起集会に使われた、秩父の椋神社の狛犬は、いわゆるライオンではなくオオカミである。これは三峯神社などに代表されるような、秩父におけるオオカミ信仰によるものである。彼はこのころから秩父の獣たち、特にオオカミに想いを寄せ、オオカミなどにまつわる、半ば神話的な世界を俳句に描くようになった。

語り継ぐ白狼のことわれら老いて	金子兜太
おおかみに蛍が一つ付いていた	金子兜太

彼はまた、次のように語る。少し長いが、晩年の作品『他界』（2014）から引用する。

ちょうど熊谷に移り住んだ頃から私の句にオオカミがよく登場するようになります。登場というのはちょっと品が良すぎるな、オオカミが跳び出すようになった。

これも秩父と大いに関係があります。（中略）秩父の山の匂い、山の形、秩父古生層……。秩父は、非常に古い時代の海から隆起して陸地になったわけですからね。岩にも古いのがたくさんある。秩父古生層の塊の秩父、そうした映像が幾重にも重なって、ある日、突然、わたしの中にオオカミが跳び出してきた。

オオカミが立っている場所は秩父だと、こう確信するわけです。そうしたら、オオカミが秩父の象徴みたいに思えてきたんです。だから、自分の産土の象徴はオオカミである。そう思ったら「おおかみに蛍が一つ付いていた」が出てきた。

この句ができたあたりからわたしの中に秩父の土が非常にはっきり感

じられて、わたしの支えになってきました。次第に土が、郷里の土、産土の土、いのちイコール土と思えるほどに深くかかわる土というものが見えてきた。そのうちわたしのアニミズムの世界だ、と自分でも言えるような世界がなんとなく感じられるようになっていったというわけです。⁽⁵⁹⁾

彼は自分の息子に真土（まつち）と名付けるほど、「土」を神聖なものとし、「土」への思いを持ち続けた俳人であるが、このように「秩父の土」を見つめることは、現実には根差しつつも神話的なアニミズムの世界を描くことにつながったのである。

6. 秩父から世界へ：

ローカルとグローバルをつなぐ声として

金子兜太が世界に知られるようになったのは、秩父に根差し、定住漂泊を主張し始めた1970年代からだ。1976年、当時トロント大学教授、のちスタンフォード大学教授の上田真によって『日本近代俳句選集』*Modern Japanese Haiku: An Anthology* が編まれ、正岡子規から現代までの代表的な俳人が紹介された。この本の末尾、もっとも新しい俳人として紹介されたのが金子兜太であった。そこで大きく取り上げられたのは、いわゆる「前衛俳句」と呼ばれた頃の作品である。

若い俳人として、彼は政治や社会の諸問題に深い関心を抱いていた故、彼は俳句で原爆や労働争議日米関係などを扱った。彼により、俳句は今だかつてなかったほどに政治的で社会的になった。しかしその後、彼は俳句の形式により深い関心を抱くようになった。彼は、俳人にとって最

も大切なことは自然から取られた形を自ら再構成することにより、自己の内面のヴィジョンを再現することだと主張した。兜太の考えでは、俳人は与えられた自然としての自らの主題をただコピーする受動的な模倣者ではなく、自然から離れた姿やイメージを描いたり、ふさわしいと俳人自身がみなす方法によってそれらを操作したりすることによって、自らの主題を創り出す能動的な一個人である。このように、兜太は前衛的なシュールレアリスムの芸術家に近付いている。実際に、彼の俳句は前衛俳句と呼ばれている。⁽⁶⁰⁾ (引用部の和訳は引用者による)

彼は社会的な関心が強く、政治問題も俳句に描く俳人で、自然から取られた形を再構成することによって自己の内面のヴィジョンを描く、シュールレアリスム的な作風の前衛作家として紹介された。この本による紹介の頃から、彼の国際的な活動も数を増してゆく。1983年に現代俳句協会の会長に就任した彼は、現代俳句協会の中に国際部を設置し、積極的に世界の俳人と交流を行うなど、俳句の世界的な発信を行っていった。

1999年には「松山宣言」として、彼は俳句の国際化に対する提言を有馬朗人、芳賀徹、上田真、ジャン・ジャック・オリガス、宗左近とともに行った。「俳句は世界の文学である。俳句は、世界のあらゆる民族に向かって開かれている。いま、この小さな十七音の短詩型が、世界のあらゆる詩歌の可能性を広げようとしている」⁽⁶¹⁾という言葉から始まるこの宣言は、次のように、世界における俳句について主張する。

我々は、この宣言において、俳句の有する子規の革新以来の本質的な世界性に着目し、過去にそれが世界に広まっていった状況を考察し、未来における可能性を世界的な文化の潮流の中で予言した。我々はここで、日本語による俳句性の本質とされてきた定型と季語について、世界的な

文脈の中ではそれぞれの言語においてその本質を把握すべき問題と考え、俳句的な精神を有する世界のあらゆる詩型を「俳句」として新たに迎え入れたい。⁽⁶²⁾

このように、彼は五七五の韻律や季語は、日本語以外の俳句において絶対的な基準ではないとした。そしてこの宣言は「我々は、全世界の詩人が詩の運動として、自国の言葉をどこまで短縮し、凝縮することができるか、追求することを期待する」⁽⁶³⁾と続き、「俳句は世界を受け入れ、世界に向かって開かれる」⁽⁶⁴⁾と結ばれている。日本語以外で書かれたものは俳句ではない、と主張する論者もいるが、金子兜太は、それらも俳句として、対等に扱おうとしたのである。

俳句界の世界的なセレブリティとなった金子兜太だが、彼の作品や思想、その生涯などについて概観できる資料は、長年日本語以外に存在しなかった。そのため、熊本大学において“Kon Nichi Haiku Translation Group”(団体名は金子兜太の著作『今日の俳句』に由来する)がリチャード・ギルバート、堀正広、伊東裕起らによって2002年に立ち上げられた。同グループは、2011年から2013年にかけて、四巻本の金子兜太の作品集を、アメリカのヴァージニア州の出版社 Red Moon Press から『兜太』*Tohta*⁽⁶⁵⁾シリーズとして出版した。選集の1巻『金子兜太：生きもの諷詠』*Kaneko Tohta — Ikimono fūei: Poetic Composition on Living Things* は講演「生きもの諷詠」の翻訳であり、2巻『俳句の未来：金子兜太に聞く』*The Future of Haiku: An Interview with Kaneko Tohta* は2010年に行われた、金子兜太と伊東裕起の対談の翻訳である。3巻と4巻『金子兜太：俳句と註釈』(第一部～第二部) *Kaneko Tohta: Haiku & Commentary, Part One. Kaneko Tohta: Haiku & Commentary, Part Two* は註釈付きの俳句の日英対訳で、東日本大震災後の2012年までの作品を収録した。

また、2018年の金子兜太の逝去に際し、同4巻本は改訂され、彼の絶筆までの俳句や未収録インタビューなどを収めた増補版『いのちと言う俳句：金子兜太選集』*Haiku as Life: A Kaneko Tohta Omnibus — Essays, an Interview, Commentary and Selected Haiku in Translation*として出版された。同書に収められた翻訳資料などを用いた、海外での更なる兜太研究が待たれる。

7. 生きもの諷詠

金子兜太は1970年代以降、「土」に根差したアニミズムの世界を追求してきたが、晩年、2000年代も終わり、2010年代に入る頃に「生きもの諷詠」という考え方を提唱した。これは、高浜虚子の「花鳥諷詠」に対する概念である。高浜虚子は「花鳥諷詠」を提唱し、花鳥風月たる日本の伝統的な美的意識に基づく自然を「客観写生」の手法によって己を無にして描くことにより「自然随順」の境地に至ることを俳句の目指すべきところとした。虚子は弟子にそれを奨励するとともに、自らもその境地を追求した。これに対し、金子兜太は2009年に第46回の現代俳句全国大会講演にて虚子の「花鳥諷詠」を批判し、それに対するものとして「生きもの諷詠」を提唱した。虚子は一見、自然に向き合っているようだが、そもそもそのように自然と人間を分け、自然を客観的に扱おうとする態度そのものが「かなり卑屈な近代主義」⁽⁶⁶⁾であると、兜太は虚子の考えを批判した。人間も他の生きものも平等であって対等なのだから、一方が主で一方が従のような随順という考えは必要ない⁽⁶⁷⁾というのが兜太の言い分である。

自然と人間を区別しない「生きもの諷詠」の境地に至った俳人の例として、兜太は小林一茶を挙げる。兜太によれば一茶は「定住漂泊」の俳人の代表格だが、兜太はその「定住漂泊」の考えを「生きもの諷詠」に発展させたのだ。

兜太の「定住漂泊」の理論では「日常」(社会)に「定住」しながら、そ

れと一体化して流されないように抗うことが重視されたが、彼はその姿勢を「生きもの感覚」と名付けなおしたのである⁽⁶⁸⁾。「定住漂泊」の状態の中で、人は「原郷、つまり「人間のおおもとのふるさと」を志向する。「原郷」という、いのちの根源とも言える場は、本能そのものが目指すもの⁽⁶⁹⁾でもあり、「すべてのいのちが自分のいのちとまったく違和感なく混ざりあっている」⁽⁷⁰⁾場である。またそのように人間の本来の姿に帰ろうとする思いを「生きもの感覚」という。この「生きもの感覚」は自然と人間を区別しない姿勢につながり、そのような姿勢で俳句を詠むことこそ「生きもの諷詠」だとしたのである。

生きもの感覚で繋がっている人たち、それが生きものだという平等の思いを持ち、自然の中で生きていたい。もう花や鳥なんて限定した自然観でなく、われわれ人間を含めた凡てが自然であるをご了解いただいて、それがもつ美しい感性で触れ合いたい。それが俳句の世界である、これが現代の俳句観だと私は思っています。⁽⁷¹⁾

高浜虚子の「花鳥諷詠」では、「花や鳥」（花鳥風月）のように、日本の古典文学において讃えられた「限定した自然観」に依っていた⁽⁷²⁾。それに対し、兜太の「生きもの諷詠」では、欲望に満ちた人間も同じ「生きもの」と見做し、その姿を詠い上げることを肯定する。かつて積極的に社会問題を扱うと共に、個人の主観的な作家性の表出を重視した「社会性俳句」の旗手であった金子兜太は、晩年にこのような境地に至ったのである。

8. 他界：いのちは死なない

最晩年の金子兜太は、「生きもの諷詠」から更に歩を進め、生きものと死

者との区別をなくすことを目指していった。それが彼の「他界」観である。彼の日課は、立禅の瞑想の中で、30分以上かけて自らにとって重要だった死者たち（飼っていた犬と猫を含むため、人間だけでない）120の魂を思い返し、思いを巡らせることであった⁽⁷³⁾。彼は自らの立禅での死者との交際と「他界」観について、次のように語る。

こうして毎朝、他界の連中と親しんでいると、次第にみんながいきいきと生きている様子がリアルに感じられるようになってきたんです。そのあたりからですね。人間のいのちは死なない、ほかの世界に行くだけだという単純極まりない確信が持てるようになってきたのは。何か軽い形ですが、肝が据わってきたというか、死ぬことにあんまり特別な感じがしなくなってきました。⁽⁷⁴⁾

彼の妻・皆子もまた俳人として著名であったが、彼女は81歳でこの世を去った。兜太は彼女を悼む俳句を多く残しているが、その多くはこの世と「他界」の間に距離を置かないものである。

亡妻いまこの木に在りや楷芽吹く

金子兜太

彼は、亡くなった妻の存在を自宅の庭の木に感じる。それは素朴な輪廻転生の信仰にも近いが、より実感のこもったものである。

最晩年に、彼は繰り返し「いのちは死なない」⁽⁷⁵⁾と述べ、死とはいのちの在り方が変わるだけだと述べるようになる。また、自らの死について、次のような句を示した。

春落日しかし日暮れを急がない

金子兜太

彼はこのように慌てず急がず、そして穏やかに自らの落日（つまり死）を迎える覚悟を固めていた。そして2018年2月20日、彼はこの世を去った。「いのちは死なない」という彼の哲学のもと、病床での絶筆の句はあるが、辞世の句はない⁽⁷⁶⁾。その絶筆の句は以下の2つの句である。

陽の柔ら歩ききれない遠い家	金子兜太
河より掛け声さすらいの終わるその日	金子兜太

これらの句は、「春落日～」の句より柔らかい印象を読者に与える。「春落日～」は落ち着いた死を迎えたいという確固たる決意を感じるものの、逆に語気が強く、また理屈に走りすぎている。一方、「陽の柔ら～」や「河より掛け声」は表現を整理できていない点を若干感じる（俳句的省略法があるとはいえ、「歩ききれない」のは道か家か、など）ものの、「春落日～」よりも穏やかな印象である。彼にとっての死、あるいは「他界」への移行は、彼が以前思い描いていたものよりも穏やかだったのだろう。

おわりに

以上、本論では、新興俳句から戦後の現代俳句の流れを概観し、金子兜太の主要な業績として、「社会性俳句」と「造型論」、「定住漂泊」について簡単に論じた後、彼と世界とのつながりや、晩年の「生きもの諷詠」、最晩年の「他界」と彼の絶筆句について論じた。秩父に根差し、ローカルとグローバルをつなぐ、人間的な表現を追い続けた金子兜太の声は、「いのちは死なない」と彼が信じたように、形を超えて息づき続けるだろう。

(本稿は2018年城西大学公開講座「ローカルとグローバルの狭間で～過去から未来へ～」(第五回)において発表した「金子兜太と現代俳句、そして世界」の発表原稿を大幅に加筆修正したものである)

〈註〉

- (1) 対馬康子「ナショナルアイデンティティー」『現代俳句』2018年8月号. 29.
- (2) 愛媛県文化振興財団。「正岡子規国際俳句賞 平成20年度 受賞者 大賞 金子兜太 受賞理由」<https://web.archive.org/web/20140725233751/http://www.ecf.or.jp/shiki_haiku/details1.html> para. 9.
- (3) ただし、金子兜太自身は「前衛俳句」という用語を好んではいなかった。
- (4) 現代俳句協会、現代俳句協会ブログ. 2010年12月5日. <http://gendaihaiku.blogspot.com/2010_12_05_archive.html>
- (5) 金子兜太『定住漂泊』(春秋社, 1972) 226.
- (6) 田島和夫『新興俳人の群像: 「京大俳句」の光と影』(思文閣出版, 2005) 6.
- (7) 同上, 3.
- (8) 同上, 6-7.
- (9) 同上, 8-14.
- (10) 『馬酔木』は元来、佐々木綾華によって『破魔弓』として1918年に創刊・主宰されたものだが、1928年に秋桜子によって改題され、1929年から秋桜子の主宰となった。
- (11) 『若鮎』は戦後に『雁坂』と改題した。
- (12) 金子兜太『わが戦後俳句史』(岩波書店, 1985) 73.
- (13) 同上.
- (14) 金子兜太は「戦後俳句」という言葉をここで用いているが、「戦後の現代俳句」の意として引用する。
- (15) 金子1985, 2.
- (16) 川名大『昭和俳句の検証: 俳壇史から俳句表現史へ』(笠間書院, 2015), 13.
- (17) 同上, 8.
- (18) 同上, 4-12.
- (19) 金子兜太編『現代の俳人101』(新書館, 2004) 45.
- (20) 本論文における人間探求派の作品は金子兜太・編『現代の俳人101』(新書館, 2004)、新興俳句の作品は田島和夫『新興俳人の群像: 「京大俳句」の光と影』(思文閣出版, 2005)による。
- (21) 川名, 41.
- (22) 『特高月報』に名前が記されているのは44人である。岸風三樓は『京大俳

句』第一次検挙の際に京都府警川端署に検束されたが、まもなく釈放されたので『特高月報』に名前の記載はない(田島,119)。また、田島と川名大によれば、『宇治山田鶏頭陣』の福田三郎も検挙されたという(田島,195;川名,340)。以上も含めると、検挙者は計46名となる。

(23) 田島,179-80;196.

(24) 同上,198-201.

(25) 同上,217-18.

(26) 同上,183-84.

(27) この句の出典は川名2015による。

(28) 金子1985,34-35.

(29) 金子1972,234.

(30) 東京新聞「俳句弾圧不忘の碑」故金子兜太さんが呼び掛け 2018年2月22日。 <<http://www.tokyo-np.co.jp/article/national/list/201802/CK2018022202000129.html>>

(31) 桑原武夫『第二芸術』(講談社,1976)30.

(32) 同上,28.

(33) 同上,31.

(34) 同上,33.

(35) 金子1972,226.

(36) 川名,85.

(37) 同上.

(38) 金子兜太『金子兜太集：第四巻 わが俳句人生』(筑摩書房,2002b)189.

(39) 同上.

(40) 同上,188-89.

(41) 本論文における金子兜太の作品は、金子兜太『金子兜太集：第一巻 全句集』(筑摩書房,2002)による。ただし、「春落日～」は金子兜太『他界』(講談社,2014)から、「陽の柔ら～」および「河より掛け声～」は『現代俳句』2018年7月号による。

(42) 同上,282.

(43) 同上,213.

(44) 同上,218.

(45) 金子兜太『他界』(講談社,2014)85.

(46) 同上,84.

(47) 金子1972,18.

(48) 同上,19.

(49) 金子兜太『金子兜太集：第三巻 山頭火—漂泊の俳人・秩父山河』（筑摩書房, 2002 c）の出版社による宣伝文には「著者の文学的資質を育んだ原郷秩父の風土」とあり、当然のように秩父を「原郷」と言い切っているが、この宣伝文は兜太が認めたものか不明である。

(50) 同上, 28.

(51) 同上, 26.

(52) 同上.

(53) 同上, 28.

(54) 同上, 10 ; 同上, 26.

(55) 同上, 9.

(56) 同上, 266.

(57) 同上, 269.

(58) 同上.

(59) 金子2014, 117-18.

(60) Makoto Ueda, *Modern Japanese Haiku: An Anthology*. (Toronto: U of Toronto P, 1976) 22.

(61) 有馬朗人, 芳賀徹, 上田真, 金子兜太, ジャン・ジャック・オリガス, 宗左近「松山宣言」愛媛県文化振興財団, 1999. <<http://haikusphere.sakura.ne.jp/tra/1999/matsuyama-sengen.html>> para. 1.

(62) 同上, para. 32.

(63) 同上, para. 34.

(64) 同上, para. 38.

(65) 「兜太」のローマ字表記について、ヘボン式の表記法である“Tōta”や“Tōta”、あるいは長音を示さない“Tota”とするのが一般的かもしれない。しかし金子兜太自身は“h”を入れた“Tohta”というスペリングを好んでおり、自著や現代俳句協会の公式の書籍などでは“Tohta”を用いている。

(66) 金子兜太「第四十六回現代俳句全国大会講演：『生きもの諷詠』『現代俳句』2010年1月号. 16.

(67) 同上.

(68) 金子2014, 85.

(69) 同上.

(70) 同上, 106.

(71) 金子2010, 26.

(72) 高浜虚子の「花鳥諷詠」も人間を含んでいるという意見もあるが、金子兜太は虚子の考えをこのように見做していた。また、金子兜太が重視した江戸期の俳

人は小林一茶だが、雪国生まれの一茶は雪月花として数えられる雪を美しいと思えず、自らを「景色の罪人」と呼んでいた。このように、京都や江戸の季節感によって編まれた伝統的な歳時記に馴染めずに苦しんだ一茶を兜太は評価し、歳時記の季節感を実感よりも重視した（と兜太が見做した）虚子を批判した。金子兜太による一茶の「景色の罪人」と兜太の季語論については、Richard Gilbert, et. al., *Haiku as Life: A Kaneko Tohta Omnibus--Essays, an Interview, Commentary and Selected Haiku in Translation*. (Winchester, VA: Red Moon Press) 80-81.参照。

(73) 金子2014, 159-65.

(74) 同上, 165.

(75) 同上, 130; 166, 202-03.

(76) 安西篤「金子兜太のあゆみ」『現代俳句』2018年7月号, 26.